

# 会報

No. 10

2013年12月20日発行

発行・編集 日本学習社会学会事務局

Japanese Association for the Study of Learning Society

## 日本学習社会学会

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 教育学部 佐藤千津研究室

Tel/Fax 042-329-7741 slarningsociety@gmail.com

学会 HP <http://www.edu.hyogo-u.ac.jp/keiei/jasls/>

会報第10号をお届けします。本号では8月31日・9月1日に開催されました第10回大会の公開シンポジウムおよび課題研究の報告、理事会および総会の報告、年報第10号の自由研究論文の募集などについてお知らせいたします。会員の皆様には、引き続き本学会の発展のためにご協力くださいますようお願い申し上げます。

### 第10回研究大会を終えて 赤尾 勝己（関西大学）

1000年に一度と言われるほどの猛暑の中、8月31日（土）～9月1日（日）の両日、関西大学100周年記念会館で日本学習社会学会第10回大会を無事に開催できましたことを、ここにご報告申し上げます。例年に比べてやや少ない、両日で77名の参加者によるこじんまりした大会になりましたが、小島弘道会長、臼井智美事務局長をはじめ、理事の先生方、そして参加していただいた会員の皆様にはたいへんお世話になりました。

今回の大会では、例年開催されている公開シンポジウムに加えて、学会設立10周年記念シンポジウムが開催されました。小島会長が基調報告の中で、知識基盤社会、市民参画、少子高齢化社会というキーワードを手がかりに、学習という人間の行為を社会という視野において多面的・多角的に研究していくことを目的して本学会が設立された経緯に触れられたあとで、この期間に起こった3.11東日本大震災が、私たちの生きることと学ぶことの意義を大きく変えた点、すなわち「自分のための学びがある」という次元を越えて、関係的自律人として他者の存在や営みを視野に置いた学びがあること、また必要であり大切であること、「他者との共生・共存、他者への貢献としての学びの意義」を強調されたことはたいへん意義深いものがあるように感じられました。また、この基調報告に続いて篠原会員が、学習社会を自己実現、公共性、関係性の三次元の中において対象化していく理論枠組みを示されたこと、さらに福田会員がグローバリズムの中で、教育が商品化し公教育が破壊されていくことを指摘された点もたいへん刺激的でありました。ここには書ききれ

ない他の会員からのご提案を拝聴する中で、改めて私たちの学習研究のあり方が問われているように思いました。

今回の大会開催に際しましては、若槻健・大会事務局長にほとんどすべての陣頭指揮を執っていただきました。関西大学文学部教育文化専修でよき同僚でもあります若槻先生は、本学のゼミ生と大阪教育大学の臼井ゼミの学生・院生の皆さんを見事に組織しておられました。私の役割は大学当局との交渉だけでした。この場を借りて、若槻先生に厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、本学会も第10回大会という大きな区切りを乗り越えて、これから新しい会長の下で新機軸を出してより活性化していかれることをご期待申し上げます。会員の皆様におかれましては今後ともどうぞよろしくようお願い申し上げます。

#### CONTENTS

第10回研究大会を終えて	1
公開シンポジウム報告	2
日本学習社会学会設立	
10周年記念シンポジウム報告	3
課題研究Ⅰ報告	4
課題研究Ⅱ報告	5
理事会報告	6
第10回大会総会報告	13
日本学習社会学会第4期理事	15
監査・各種委員会・WG	16
学会褒賞制度の創設と	
「学会功労賞」の授与	20
お知らせ	21
年報第10号の自由投稿論文の募集	22

## 公開シンポジウム

### 学習を社会的に研究する—「学習社会学」の提案—

#### 【シンポジスト】

志水 宏吉（大阪大学）「教育社会学の立場から」

渡邊 洋子（京都大学）「成人教育学の立場から」

赤尾 勝己（関西大学）「学習社会学の構想」

#### 【司会】

若槻 健（関西大学）

第10回大会の公開シンポジウムは、大会1日目（15時50分～18時20分）に開催しました。当日は、悪天候にもかかわらず、77名の方に参加いただき感謝申し上げます。同シンポジウムの構成は以下のようでした。

日本の生涯学習研究では、これまで人間の学習を教育学的・心理学的観点から研究されその蓄積がなされてきた。それに対し、本シンポジウムでは、学習を社会的な観点から研究していくことについてのアイデアを、欧米および国内の研究蓄積から提案していくことが狙いとされた。日本学習社会学会は、広く生涯学習社会について研究する学会であるが、これから人間の学習を社会的に研究する「学習社会学」（sociology of learning）を構想する段階が到来している。これは、学校教育における子どもたちの学習を社会的に研究することと、成人の学習を社会的に研究することとを両輪としている。そこで、学校教育における学習の社会学について大阪大学の志水宏吉氏から、成人学習の社会学について京都大学の渡邊洋子会員から報告いただいた。さらに学校学習と成人学習をともに見据えながら学習社会学の大枠について関西大学の赤尾勝己会員より報告いただいた。

志水氏からは、B.バーンステインとP.ブルデューという二人の文化的再生産論者の紹介を通じて、社会学が、学校内の文化伝達の過程が不平等な社会構造の再生産に寄与しているという事実を明らかにし

てきたことが述べられた。しかし、学校内における文化伝達の過程は、決して「再生産」だけに集約されるものではない。そこにおける「文化的生産」の諸相が、社会変革の契機となりうる。その例として、P.ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』や大阪の高校の「反貧困学習」の事例が紹介された。

渡邊会員からは、まず日本社会における「成人教育」への対応経緯と論点を明らかにされた。続いて、「成人学習」への社会的アプローチを試みてきたPeter Jarvisの議論が紹介され、その批判的検討をもとに、現代日本における「成人学習の社会学」研究に向けた展望が述べられた。

赤尾会員からは、まず、人間の学習を、ミクロ・レベル、マクロ・レベル、グローバル・レベルの観点からと、階級、性、人種・民族の観点から検討され、これら3つのレベルと3種の要因がどのように人間の学習に影響を与えているのか考察された。さらに、資格証明主義などの問題点の検討などを通じて、学習を社会的に考察する「学習社会学」の構想が提起された。

限られた時間のため、それぞれの報告を絡み合わせ、議論を深めるには至らなかったが、今後本学会で研究していかなければいけない視点が多く提示された有意義なシンポジウムとなった。

報告：若槻 健（関西大学）

## 日本学習社会学会設立 10 周年記念シンポジウム

### 日本学習社会学会の使命(存在理由)と課題(学術性と実践性)を考える

【基調報告】小島 弘道 (龍谷大学)「日本学習社会学会の使命 (存在理由) と課題 (学術性と実践性)」

【提案】篠原 清昭 (岐阜大学)「研究方法論の観点から」

福田 誠治 (都留文科大学)「教育のグローバリズムと国際的教育行政管理を教育の商品化ならびに公教育の破壊として把握する観点から」

佐久間 邦友 (兵庫教育大学)「学習塾研究の観点から」

古田 雄一 (筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員)「シティズンシップ教育研究の観点から」

前田 耕司 (早稲田大学)「先住民族のエンパワーメントと学習権保障の観点から」

三輪 建二 (お茶の水女子大学)「学会にふさわしい研究論文のあり方という観点から」

【コメンテーター】川野辺 敏 (星槎大学)

【司会・進行】岩崎 正吾 (早稲田大学)

日本学習社会学会は、学習という人間の行為を社会という視野において多面的、多角的に研究しようとして設立された。今風に言えば本学会に期待したものは、学習の意義を人間が独り立ちし、社会の中で自律的に生きる力や機能の形成に求めるとともに、そうした人間と学習の関係を社会システムとして構築する可能性について研究する集団の形成であった。関係的自律人として、さらに関係的自律を基盤とした共生・共存型社会をこれからの社会像とし、その実現を図るための研究と実践を本学会の使命にしたのである。

2004 年に設立された本学会は 10 年の歳月を重ね今日に至った。10 年の間に日本内外の社会や環境は大きく変化した。その変化は関係的自律を前提とした共生・共存型社会実現の危機を生み、深刻化させ、またさまざまな格差の進行や地域社会の崩壊は学習の危機を生んだ。本学会は 3.11 東日本大震災が生きることと学ぶことの意義を大きく変え、また変わらざるを得ないこととして受け止めた。自分のために学びがあるという次元を越えて、関係的自律人として他者の存在や営みを視野に置いた学びがあること、また必要であり大切であることを多くの人たちが感じ始めた。他者との共生・共存、他者への貢献としての学びの意義を感じるようになってきたのではないかと考える。

このたび本学会が設立 10 周年を迎えるに当たり「日本学習社会学会設立 10 周年記念事業シンポジウム」と題する記念シンポジウムを開催した。

まず小島弘道 (会長・龍谷大学) が「日本学習社

会学会の使命(存在理由)と課題(学術性と実践性)」と題する基調報告を行い、篠原清昭 (研究推進委員長・岐阜大学) が「研究方法論の観点から」、福田誠治 (都留文科大学) が「教育のグローバリズムと国際的教育行政管理を教育の商品化並びに教育の破壊として把握する観点から」、佐久間邦友 (兵庫教育大学) が「学習塾研究の観点から」、吉田雄一 (筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員) が「シティズンシップ教育研究の観点から」、前田耕司 (早稲田大学) が「先住民族のエンパワーメントと学習権保障の観点から」、三輪建二 (年報編集委員長・お茶の水女子大学) が「学会にふさわしい研究論文のあり方の観点から」と題する提案をそれぞれを行った(三輪先生は当日は急病のため欠席されました。報告内容は当日配布されています)。

コメンテータの川野辺敏 (前会長・星槎大学) からは、学会趣意書と各報告により、本学会の意義と重要性を再確認したこと、UNESCO の 1946 年の「人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という言葉を思い出したことなどの感想が述べられとともに、人間の喜び (創造、他者に役立つ、出会い・感動) を、子どもにどう伝え、そのための教育、学習がどうあるべきかについて真摯に議論する学会であってほしいとの要望があった。

司会・進行は岩崎正吾 (会長代行・早稲田大学)。

本シンポジウムの様子は年報に掲載される予定なので詳細はそちらをご覧ください。

以上、敬称略。

報告：小島 弘道 (龍谷大学)

## 課題研究Ⅰ報告

### 学校と地域の関係を問いなおす

#### 【提案者】

芝田 雅彦（大阪府松原市立松原第七中学校）

大林 正史（鳴門教育大学）

#### 【コーディネーター】

岩永 定（熊本大学）

仲田 康一（浜松大学）

本課題研究は、「新しい公共空間の場における学習社会づくりの理論と方法の検討」を共通テーマに2年間にわたって検討してきた。学校経営グループにおいては、学校教育の統治構造の揺らぎについて、主として学校経営への保護者・住民参加の視点から国内外の状況を踏まえながら、2年間にわたり検討を加えてきた。本年度は最終年度として、現段階における「学校と地域の関係」を、再度、問い直すことを趣旨とした。発表・討論の時間を充分確保したいということから、登壇者は例年より1名少ない2名とし、30分ずつの発表の後、残り時間を議論とした。実践と研究の両面からアプローチするため、大阪府松原市立松原第七中学校長の芝田雅彦氏と、鳴門教育大学の大林正史会員にご登壇いただいた。

芝田雅彦氏には、松原第七中学校区における豊富な経験をもとに、同地域の地域連携実践について話題提供していただいた。近隣の府営団地に中国残留孤児の家族の渡日・帰国が増加した同校区では、国際理解教育が学校の中心課題の一つであった。松原第七中学校は、多様な文化を持つ地域住民とともに行う「地域の文化祭」を国際文化フェスタと位置づけ、〈夢地域共に生きる！〉をテーマに平成9年より実施している。今日に至る過程で、学校教育への地域住民の参加が広がり、地域教育協議会に積極的に関わる校区学校園教職員も増えていったことが、実体験をもとに語られた。

大林正史会員は、ご自身が行ってきた学校運営協議会（コミュニティ・スクール）に関する研究を踏まえ、ソーシャル・キャピタルの観点から話題提供いただいた。まず、コミュニティ・スクールの逆機能と可能性を整理したうえで、学校運営協議会を学校と地域との関係を形成する場として捉える「ソーシャル・キャピタル蓄積型コミュニティ・スクール」の捉え方が実践上並びに研究上に有意義であるとの提案がなされた。

討論においては、貧困・過疎・文化的多様性・災害等により地域自体が大きな課題を有している地域において、いかに学校-地域連携を構築するか、学力テスト等の一元的な評価の中で競争を強いられるなか、一元競争を補完するのではない形での地域連携はいかに展望できるか等について議論がなされた。また、学校運営協議会については、その機能モデルとしての「ソーシャル・キャピタル蓄積型」の意義とともに、岩永会員による「共同決定型」をいかに構想するか、そこに課題はないか等について議論された。

最後になるが、会員外から登壇して下さった芝田校長をはじめ、ご登壇いただいた大林会員、フロアにて活発な議論を展開して下さった会員内外の各位に御礼申し上げます。

報告：仲田 康一（浜松大学）

## 課題研究Ⅱ報告

### 超高齢社会における高齢者(シニア)の生涯学習の現状と課題

#### 【報告者】

合田 遼（文部科学省生涯学習政策局社会教育課専門官（環境・高齢者担当））

石川 麻美（江戸川総合人生大学推進室長）

益川 浩一（岐阜大学）

石井山 竜平（東北大学）

#### 【コーディネーター】

益川 浩一（岐阜大学）

#### 【司会】

坪内 一（横浜市立中央図書館）

平成 25 年現在、わが国の人口の約 25%は 65 歳以上、約 10%は 75 歳以上である。「超高齢社会・日本」の現実には、①医療・社会保障費の増大、②単身老人世帯の増加＝高齢者の孤立、③地域社会の活力低下、等様々な課題を導く。「長命」がただちに「長寿」と言えなくなってしまったこの時代に、「ポジティブ・エイジング」の視点から高齢者の参画や自立を促し、豊かな社会を切り拓くことは可能か。そのために生涯学習はいかなる役割を果たしうるか。課題研究Ⅱでは、こうした問題意識から、4 つの報告と意見交換が行われた。

初めに、文部科学省の合田遼専門官から、高齢者（シニア）の生涯学習振興施策の方向性と課題について、報告がなされた。同省では「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」を設置し検討を進めてきたが、平成 24 年 3 月にその報告書がまとめられた。これに基づき、合田氏は、高齢者に対するマイナスイメージ（老人神話）から脱却し、社会から支えられる存在ではなく「地域社会の主役」として高齢者が地域の課題解決に活躍できるような環境整備の必要性と、そのための生涯学習の意義や役割について述べた。

次に、三輪建二会員に代わり登壇した石川麻美氏が、自ら推進室長を務める江戸川総合人生大学の取組を報告した。これは「社会貢献を目指す区民の学びと実践の場」として平成 16 年に東京都江戸川区が開学したもので、既に 530 人以上が卒業。学生の自主運営を旨とし、在校生と卒業生による 47 ものボラ

ンティア団体が、地域で活動しているとのこと。

続いて、益川浩一会員から、岐阜大学・十六銀行の産学連携プロジェクトとして平成 13 年から実施されている「くるるセミナー」の紹介があった。「聞く」「見る」「する」⇒「くるる」を愛称に、活動的なシニア世代の学習プログラムを提供し「受け手からアクターへの転換」と「ソーシャルキャピタルの蓄積」を目指すものである。

最後に、石井山竜平会員が、仙台市で平成 21 年以来開講している「ライフレビュー講座」について報告を行った。高齢者が自分の人生を振り返り、語り合い、書き綴る中での、自己理解の深化と互いの存在価値の共有を狙いとするものだが、石井山報告は、「語ることを躊躇」する参加者の切実な思いから、講座実施者の気づきの意味をも掘り下げていった。

討議では、高齢者の多様な実態（健康面や社会・経済的側面等）の認識の重要性、次世代への文化の継承という使命、高齢学習を支援する専門職の不足等、幅広い視点からの議論が展開された。とりわけ、死に向かう学びを通して高齢者が自らと向き合い、生きる力を「学び直していく」ことの意義をめぐるやりとりは、印象深いものであった。

当日の参加者は 21 人。十分な研究協議には至らなかったが、4 人の充実した報告そのものが、大きな成果であった。改めて、関係者及び参加者各位に、深く感謝したい。

報告：坪内 一（横浜市立中央図書館）

## 理事会報告

### 2012年度第3回理事会

日時 2013年3月16日(土) 16:00~18:30

会場 早稲田大学22号館510室

出席者 前田耕司、川野辺敏、佐藤千津、森岡修一、関啓子、金塚基、三輪建二、小島弘道、岩崎正吾、臼井智美(敬称略) 計10名

欠席者 玉井康之、大迫章史、佐藤晴雄、新井郁男、亀井浩明、貝ノ瀬滋、中村香、堀井啓幸、篠原清昭、平井貴美代、浅野秀重、鈴木三平、赤尾勝己、三上和夫、金子照基、岩永定、柳澤良明、山崎清男、藤川正幸(敬称略) 計19名

- ・小島会長より、理事会に先立って、同日13:30~15:50に国際交流委員会主催で「私たち」の研究史の中の国際交流」をテーマとする研究会の開催があったことが報告された。研究者コミュニティに焦点を当てたテーマについて、会員内外の参加者により活発な意見交換がなされたことに対して謝意が述べられ、今後も学会として、特に若手研究者の育成を視野に入れた研究活動を積極的に行っていきたいとの抱負が述べられた。

#### <報告事項>

##### 1. 事務局報告

###### (1) 学会員の現況について(報告資料1)

・臼井事務局長より、報告資料1に基づき、学会員の現況について報告がなされた。2013年3月10日現在、一般会員221人、学生会員32人、計253人である。また、前回理事会以降現在まで(2012年9月~2013年2月)の新入会員は、一般会員1人、学生会員1人、2012年9月~2013年2月の「申し出による退会者」が1人であることが報告された。あわせて、「会則第6条(3)により会員資格を失う者」が14人おり、2013年4月に会費納入の督促を行った上で、2013年5月31日までに会費の納入が確認できない者については、強制退会とする予定であることが報告された。

###### (2) その他

- 1) 臼井事務局長より、会員より次の図書の寄贈があったことが報告された。

- ・渋江かさね会員より、『成人教育者の能力開発』(鳳書房、2012年9月)
- ・佐藤千津理事より、『国際教育』(第18号、日本国際教育学会、2012年9月)
- 2) 臼井事務局長より、本学会宛に関係団体から2件の照会事項があったことが報告された。
- ・日本教育学会より、『教育学研究』第80巻第2号(2013年6月末刊行)に「2012年度教育学関連学会大会報告」を掲載予定であり、本学会にも原稿の依頼があった。原稿(別紙1)は、本学会会報第9号に掲載の大会報告等を参考に、臼井事務局長が執筆して日本教育学会に提出したことが報告された。
- ・日本学術振興会より、「第10回(平成25年度)日本学術振興会賞受賞候補者の推薦について」の案内があった(別紙2)。小島会長より、現在、本学会では、学会賞の創設に向けて規程等の整備を進める予定であることから、関係諸団体が設ける賞への対応の仕方についても、本学会の褒賞制度の整備とともに今後検討していく必要があることが説明された。

##### 2. 各種委員会報告

###### (1) 年報編集委員会(三輪年報編集委員長)(報告資料2-1)

- ・三輪年報編集委員長より、報告資料2-1に基づき2件の報告がなされた。

①年報第9号に向け、第9回大会時のシンポジウムおよび課題研究の原稿を4月1日締切で依頼していること。

②年報第9号の自由投稿論文の投稿締切は4月20日であること。※会報第9号掲載の「自由投稿論文の案内」において、投稿締切日を5月13日(月)(当日消印有効)としていることが確認されましたので訂正いたします。

###### (2) 『学習社会研究』編集委員会(前田編集委員長)(報告資料2-2)

- ・前田編集委員長より、報告資料2-2に基づき、『学習社会研究』第2号を1月15日付で刊行したことが報告された。あわせて、2012年度の委員会活動費の会計報告もなされた。

### (3) 研究推進委員会

- ・篠原研究推進委員長が欠席のため、研究推進委員会からの報告事項は無かった。

### (4) 国際交流委員会 (森岡国際交流委員長)

- ・森岡国際交流委員長より、本日、「私たち」の研究史の中の国際交流」をテーマとする研究会を開催し、岩崎正吾会員と関啓子会員に発表をしていただいたことが報告された。

### (5) 学会賞関係 (新井学会賞担当理事 ※代理：小島会長)

- ・新井学会賞担当理事が欠席のため、小島会長より、今後、学会賞創設に向けて、諸規程の整備を進めていく予定であることが報告された。

## <審議事項>

### 1. 各種委員会の活動計画案について

#### (1) 年報編集委員会 (三輪年報編集委員長) (審議資料 1-1)

- ・三輪年報編集委員長より、審議資料 1-1 に基づき、2 件について説明がなされた。
- ・まず、『年報』掲載論文の電子化および機関リポジトリ等での公開について、学会としての方針を検討する必要があるのではないかと提案がなされた。これに対し、臼井事務局長から、本件については、事務局としても審議事項 8 で予定しているの、そちらと合わせて議論したいとの話があり、了承された。
- ・次に、年報の自由研究論文の投稿資格について、「1. 本学会会員で前年度までの会費を納めている者」との規定があるが、「前年度」とはいつの時点から見て前年度を指すのかが曖昧なため、規定をより明確にする必要があるのではないかと提案がなされた (現状では、年報の投稿締切が年度明けすぐのため)。審議の結果、現在募集中の年報第 9 号への投稿については、「投稿締切日から見て前年度」との解釈を適用し、年報第 9 号の場合でいうと、2012 年度までの会費を納めている者と解釈することが確認された。今後は、この解釈に沿うように規定の表現を明確にしていくことが確認され、文言は年報編集委員会で検討することが了承された。また、これと併せて、いわゆる投稿入会の取扱いについて議論を行った結果、現行の諸規程では投稿入会を妨げる規定がないことから、投稿資格を満たしていれば

投稿可とし、当面は、投稿入会を想定した対応規定の検討は見送ることが確認された。

#### (2) 『学習社会研究』編集委員会 (前田編集委員長)

- ・前田編集委員長より、『学習社会研究』第 3 号については、今後も継続的に刊行をしていく場合には、現行の 2 年に 1 回ではなく、委員会の活動任期に合わせて 3 年に 1 回のほうがよいということ、また、掲載論文の投稿締切日は『年報』の投稿締切日を考慮して再検討する必要があることを、編集委員会で確認したことが報告された。いずれにせよ、現在の編集委員会としては、2013 年度として特段の活動を予定していないことが報告された。
- ・『学習社会研究』を継続的に刊行していくかどうかについては、本学会の財務状況や『年報』とのすみわけの観点から継続審議事項となってきたが、今後の刊行については、2013 年度予算との関連で、審議事項 4 で改めて議論することとした。

#### (3) 研究推進委員会

- ・篠原研究推進委員長が欠席のため、研究推進委員会から 2013 年度の活動計画案についての提案は無かったが、第 10 回大会プログラムとの関連で、課題研究のテーマについては、早めに報告があることが望ましいとの意見が出された。

#### (4) 国際交流委員会 (森岡国際交流委員長)

- ・森岡国際交流委員長より、2013 年度の活動計画として、今度は外部講師を招へいた研究会を開催したいと考えているが、開催内容や時期については、2013 年度の役員改選による国際交流委員会のメンバー交代を考慮して慎重に検討していく予定であることが報告された。

#### (5) 学会賞関係 (新井学会賞担当理事 ※代理：小島会長)

- ・新井学会賞担当理事が欠席のため、小島会長より、学会賞創設に向けた今後の方針が説明された。
- ・まず、学会賞として、論文賞と実践賞 (いずれも仮称) の創設に向けて規程の整備を始めたいとの提案がなされた。審議の結果、論文賞と実践賞の創設については了承された。いずれの賞も『年報』掲載論文を対象とすることとし、『学習社会研究』掲載論文は対象としないことが確認された。また、受賞対象に関しては、執筆者の所属や経験等を問わない (若手研究者に限定しない) ことも確認された。

- ・次に、2013年度が本学会10周年にあたることから、これを1つの契機として、功労賞を創設したいとの提案がなされた。審議の結果、功労賞の創設については了承された。また、10周年を契機とするものの、功労賞については2013年度に限定せず、常設の賞としていくことも確認された。
- ・これらの賞に関する規程の準備作業については、小島会長に一任することが確認された。

## 2. 2012年度決算案について(臼井事務局長)(審議資料2)

### ※仮審議

- ・臼井事務局長より、審議資料2に基づき、2012年度決算案(2013年3月10日現在概算)について説明がなされた。あわせて、各種委員会活動費の収支状況の説明がなされた。審議の結果、現時点での暫定決算案を承認するとともに、3月31日までの収支状況を踏まえて、第10回大会の総会時には改めて決算案の本審議を行うことが確認された。

## 3. 2013年度活動計画案について(臼井事務局長)(審議資料3) ※仮審議

- ・臼井事務局長より、審議資料3に基づき、2013年度活動計画案について説明がなされ、おおむね了承された。小島会長より、10周年記念事業を行いたい旨の提案がなされ、了承された。

## 4. 2013年度予算案について(臼井事務局長)(審議資料4)

### ※仮審議

- ・臼井事務局長より、審議資料4に基づき、2013年度予算案(2013年3月10日現在概算)について説明がなされた。審議の結果、支出の予算案について、㊦『学習社会研究』編集委員会活動費、㊧『学習社会研究』印刷費、㊨『学習社会研究』印刷費積立金の3つの勘定科目については廃止し、『学習社会研究』関連での支出が行われる場合には、予備費にて対応することが確認された。そのうえで、暫定案として2013年度予算案を了承し、審議事項2と同様に、本審議は第10回大会時の総会で行うことが確認された。

## 5. 第10回大会開催準備状況について(赤尾大会実行委員長 ※代理: 臼井智美大会実行委員)(審議資料5)

- ・赤尾大会実行委員長の代理として臼井智美大会実行委員より、審議資料5に基づき、第10回大会の準備状況について説明がなされた。公開シンポジウムについては、「学習を社会的に研究する—「学習社会学」の提案—」(仮題)をテーマとしたい旨の提案がなされ、了承された。大会スケジュールについてはおおむね了承されたが、理事会の開始時間や公開シンポジウムの設定時間等についての要望が出されたため、今後、大会実行委員会で検討することが確認された。

## 6. 学会10周年記念事業について(小島会長)

- ・小島会長より、2013年度に本学会が10周年を迎えることから、2013年度活動計画の1つとして、10周年記念事業を実施したいとの提案がなされた。具体的には、1つは、第10回大会時に10周年記念シンポジウムを開催すること、もう1つは、10周年記念出版事業を企画することである。審議の結果、本学会として、節目の年に積極的に外部に発信していくことは、会員獲得の観点からもとても良いことだとして、いずれの事業も実施が了承された。
- ・記念シンポジウムについては、第10回大会の公開シンポジウムおよび課題研究とのテーマの重複を避けて設定することが確認された。また、記念出版事業については、2013年度に企画検討を開始するが、必ずしも2013年度中の刊行を目指すようなスケジュールで行うものではないことが確認された。今後、10周年記念事業に関する具体的な内容やスケジュールについては、学会の財務状況等を踏まえ検討することが確認され、小島会長を中心にして準備作業を進めていくことも確認された。

## 7. 2013年度役員選挙について(臼井事務局長)(審議資料6)

- ・臼井事務局長より、審議資料6-1~6-6に基づき、2013年度に予定されている第4期の役員選挙について説明がなされ、審議の結果、提案された事項は了承された。
- ・「日本学習社会学会役員選出規程」および「日本学習社会学会役員選出に関する細則」については、原案通り加筆修正を行うことが了承された。選挙関係日程についても、原案通り進めていくことが了承された。「理事選挙実施要綱」についても、原案通り了承された。



- ・選挙時の会員所属地区については、「所属先」住所のある都道府県に基づいて決定することが確認されたが、⑦所属先が複数ある場合、⑧非常勤講師など「主たる所属先」がない場合、⑨連合大学院の学生会員の場合、については「居住地」住所のある都道府県に基づいて決定することが確認された。また、海外居住会員については、所属地区は一律に「関東地区」とすることが確認された。

## 8. 著作権ポリシーについて (臼井事務局長) (審議資料7)

- ・臼井事務局長より、審議資料7-1 および7-2に基づき、本学会の著作権ポリシーの策定について説明がなされた。審議の結果、時代の状況を踏まえると、学会の成果物を電子化して公開していくことは避けられないとの判断から、著作権ポリシー策定の必要性が確認された。今後、教育関連の他学会の対応状況を参考にして原案を作成し、2013年度第1回理事会で提案し、最終的には、第10回大会時の総会にて審議を経るというスケジュールで進めていくことが確認された。

## 2013年度第1回理事会

日時	2013年7月14日(日) 10:00~12:00
会場	早稲田大学14号館804室
出席者	新井郁男、亀井浩明、川野辺敏、森岡修一、三輪建二、小島弘道、岩崎正吾、平井貴美代、堀井啓幸、赤尾勝己、臼井智美(敬称略) 計11名
欠席者	玉井康之、大迫章史、佐藤晴雄、前田耕司、佐藤千津、貝ノ瀬滋、関啓子、中村香、金塚基、篠原清昭、浅野秀重、鈴木三平、岩永定、柳澤良明、山崎清男、藤川正幸(敬称略) 計16名

### <報告事項>

#### 1. 事務局報告

##### (1) 学会員の現況について (報告資料1)

- ・臼井事務局長より、報告資料1に基づき、学会員の現況について報告がなされた。2013年7月10日現在、一般会員207人、学生会員34人、計241人である。また、前回理事会以降現在まで(2013年4月~2013年7月)の新入会員は、一般会員2人、学生会員2人、2013年4月~2013年7月の「申し出による退会者」が6人で

あることが報告された。あわせて、「会則第6条(3)により会員資格を失った者」が11人であることが報告された。

- ・臼井事務局長より、報告資料1に基づき、第4期理事選挙実施状況について経過報告がなされた。理事および会長選出選挙の最終結果については、次回の理事会で選挙管理委員長から改めて報告があることも、あわせて報告された。

#### (2) その他

- ・臼井事務局長より、会員より次の図書の寄贈があったことが報告された。
- ・金藤ふゆ子会員(文教大学)より、『児童の放課後活動の国際比較』(明石要一、岩崎久美子、金藤ふゆ子、小林純子、土屋隆裕、錦織嘉子、小林純子、結城光夫著、福村出版、2012年10月)
- ・益川浩一会員(岐阜大学)より、『戦後岐阜社会教育史研究』(開成出版、2013年3月)

## 2. 各種委員会報告

### (1) 年報編集委員会 (三輪年報編集委員長) (報告資料2-1)

- ・三輪年報編集委員長より、報告資料2-1に基づき、年報第9号の編集作業状況について報告がなされた。予定通り、第10回大会時に会員に配布可能なスケジュールで進んでいることが確認された。

### (2) 研究推進委員会 (報告資料2-2)

- ・篠原研究推進委員長が欠席のため、臼井事務局長より報告資料2-2に基づき、第10回大会で予定している課題研究I・IIのテーマおよび概要について報告がなされた。

### (3) 国際交流委員会 (森岡国際交流委員長)

- ・森岡国際交流委員長より、本年度予定している研究会の開催については、次期の国際交流委員会が担当することになる旨、報告がなされた。

### (4) 学会賞関係 (新井学会賞担当、小島会長)

- ・小島会長より、学会賞創設に向けて規程案の検討を審議事項で予定している旨、報告がなされた。また、規程案の作成にあたり、学会賞担当理事の新井理事および佐藤晴雄理事とも意見交換を行ったことも、あわせて報告された。

### 3. 第10回大会開催準備状況について（赤尾大会実行委員長）（報告資料3）

- ・赤尾第10回大会実行委員長より、報告資料3に基づき準備状況について報告がなされた。

#### <審議事項>

##### 1. 各種委員会より

###### (1) 年報編集委員会（三輪年報編集委員長）（審議資料1-1）

- ・三輪年報編集委員長より、審議資料1-1に基づき、2件について説明がなされた。

①投稿論文の文字数超過を防止するため、論文の投稿規程の改正を提案したい。あわせて、自由投稿論文の締切日を5月13日に変更したことについても、投稿規程の改正にあわせて周知を図りたい。

②年報編集委員会の内規として、年報に掲載する書評・図書紹介の選定規準を設けたい。

- ・以上の2件について、①については、理事会としては提案を了承したが、改めて総会において審議事項とすることが確認された。②については、内規という性質上、会員に周知するものではないため、総会に諮らず理事会での了承をもって規準運用とすることが確認された。なお、この内規については、年報第10号から適用することも確認された。

###### (2) 研究推進委員会

- ・研究推進委員会より審議事項の提案はなかった。

###### (3) 国際交流委員会（森岡国際交流委員長）

- ・国際交流委員会より審議事項の提案はなかった。

###### (4) 学会賞関係（新井学会賞担当理事、小島会長）（審議資料1-2）

- ・小島会長より、審議資料1-2に基づき、学会褒賞制度の創設について提案がなされた。審議の結果、学会賞としては学術研究賞と学会功労賞を設けることが確認され、「学会賞に関する規則案」については、一部の文言を修正のうえで総会に諮ることが確認された。
- ・また、学術研究賞の審査規程については、第4期の年報編集委員会が検討を行うこと、可能であれば年報第10号の掲載論文から適用できるようなスケジュールで検討を行うこと、必ずしも毎年受賞者が出るような賞として設けるものではないこと、などが確認された。
- ・学会功労賞については、「学会賞に関する規則案」が総会です承されれば、川野辺敏前会長を受賞者として推

薦したい旨、小島会長から提案がなされ了承された。

##### 2. 学会10周年記念事業について（小島会長）（審議資料2）

- ・小島会長より、審議資料2に基づき、学会10周年記念事業として、10周年記念シンポジウムの開催と10周年記念出版事業について提案がなされた。審議の結果、記念シンポジウムについては、第10回大会時に開催することが了承された。出版事業については、実施の可能性も含めて、第4期の理事会にて継続して審議することが確認された。
- ・臼井事務局長より、審議資料7-1および7-2に基づき、本学会の著作権ポリシーの策定について説明がなされた。審議の結果、時代の状況を踏まえると、学会の成果物を電子化して公開していくことは避けられないとの判断から、著作権ポリシー策定の必要性が確認された。今後、教育関連の他学会の対応状況を参考にして原案を作成し、2013年度第1回理事会で提案し、最終的には、第10回大会時の総会にて審議を経るというスケジュールで進めていくことが確認された。

#### 2013年度第2回理事会

日時 2013年8月31日（土）11:00～13:00

会場 関西大学千里山キャンパス100周年記念会館第2会議室

出席者 赤尾勝己、岩崎正吾、臼井智美、小島弘道、金塚基、亀井浩明、川野辺敏、佐藤千津、佐藤晴雄、篠原清昭、鈴木三平、関啓子、平井貴美代、堀井啓幸、前田耕司、森岡修一（敬称略） 計16名

オブザーバー 今西幸蔵、金山光一、川野佐一郎、田中雅文、富士原雅弘、若槻健、高橋興（第4期理事候補者）、武井敦史（監査）、出相泰裕（選挙管理委員長）（敬称略） 計9名

司会 臼井事務局長

- ・会長挨拶 小島会長より開会の辞と第10回研究大会実行委員会に対する謝辞が述べられた。
- ・第10回大会実行委員長挨拶 赤尾委員長より大会開催の挨拶がなされた。
- ・第1回理事会議事録の確認・承認がなされた。

## <報告事項>

### 1. 事務局報告（臼井事務局長）

#### (1) 2012年度一般事務報告について

- ・報告資料 1-1 に基づき、学会員の現況、学会研究活動等および理事会の開催状況に関して報告がなされた。

#### (2) 2013年度活動計画案について

- ・報告資料 1-2 に基づき、活動計画に関して報告がなされた。

#### (3) その他

- ・なし

### 2. 各種委員会報告

#### (1) 年報編集委員会（三輪年報編集委員長代理・出相年報編集委員）

- ・三輪委員長の欠席により、代理で出相委員より報告資料 2-1 に基づき、年報第 9 号の刊行等について報告がなされた。

#### (2) 研究推進委員会（篠原研究推進委員長）

- ・篠原委員長より、過去 3 年間および今年度の研究推進テーマの概要について報告がなされた。

#### (3) 国際交流委員会（森岡国際交流委員長）

- ・森岡委員長より、本年 3 月 16 日に開催された研究会について報告がなされた。また、当日の報告者ならびに参加者に対する謝辞が述べられた。

#### (4) 学会賞関係

- ・小島会長より、資料「日本学習社会学会褒賞制度について」に基づき、学会賞に関する規則案の説明がなされた。なお、本件は 7 月の理事会ですでに提案されているが、総会にて審議することが確認された。本規則案が総会で承認されれば、川野辺敏会員を受賞者として推薦したい旨、小島会長より提案がなされた。また、篠原理事より「学術研究賞」の対象に著書が含まれていない点に対する質疑があり、次期理事会にて検討することになった。

#### (5) 選挙管理委員会（出相選挙管理委員長）

- ・出相委員長より、資料「日本学習社会学会理事選挙及び会長選挙に関する報告」に基づき、理事選挙および会長選挙の実施状況が報告された。理事選挙の結果、27 名の理事が選出されたこと、および理事の互選による会長選挙の結果、前田耕司理事が最多得票者として第 4 期会長候補者に選出されたことが報告された。さ

らに、理事選挙に関する問題点として、会員数の格差による理事数の少ない地区の存在や選挙地区ごとの一票の格差の問題が指摘された。また会長選挙に関しては、会長の再任規定の問題についての指摘がなされた。これらの問題は今後の検討事項とされた。

- ・前田理事より、次期会長就任に向けた挨拶があった。

### 3. 第 10 回大会実行委員会報告（赤尾大会実行委員長）

- ・赤尾大会実行委員長より、大会開催の準備状況に関する報告がなされた。

### 4. その他

- ・なし

## <審議事項>

### 1. 2012 年度決算案について

- ・臼井事務局長より、審議資料 1 に基づき、2012 年度決算案について説明があり、原案通り承認された。

### 2. 2012 年度会計監査報告について（武井監査）

- ・武井監査より、審議資料 2 に基づき、適切に会計処理がなされている旨の報告があり承認された。

### 3. 各種委員会より

#### ①年報編集委員会

- ・出相年報編集委員より、投稿論文の規程の改正について、前回理事会で「年報の所定の頁に納まること」を執筆要件として加筆することが承認されたことを踏まえ、その修正を反映した年報執筆規程が提案され承認された。また、原稿提出期限が 2011 年からは 5 月 13 日とされている点について、次号もこの日を提出期限とすることが確認された。

#### ②研究推進委員会

- ・篠原研究推進委員長より、審議事項はないことが報告された。

#### ③国際交流委員会

- ・森岡国際交流委員長より、委員会活動費の予算増額に関する説明があった。

### 4. 2013 年度予算案について

- ・臼井事務局長より、審議資料 3 に基づき、2013 年予算

案について説明がなされた。岩崎理事より支出案の勘定科目「『学習社会研究』編集委員会活動費」に予算が計上されていない点について、計上して活動を継続すべきである旨の提案があった。また、佐藤晴雄理事より次期理事会における検討のためにも編集活動費の計上は必要である旨の発言がなされた。さらに岩崎理事より、年報との差別化は当初から議論してきたことであるが、改めてその方向を目指した活動の継続および活動費計上が妥当である旨の提案がなされた。さらに前田理事より会員の研究発表の機会として年報とは別に特別論文集を設けることの重要性が指摘された。小島会長より、次期執行部で財務状況・論文審査のダブルスタンダード問題などを踏まえ『学習社会研究』のあり方を検討すること、それに必要な財源は予備費で対応するというこれまでの理事会決定について経緯の説明があった。審議の結果、予算案の「『学習社会研究』編集委員会活動費」を廃止し「『学習社会研究』編集活動費」を新設し、3万円を計上することが承認された。

#### 5. 第4期役員選挙の結果について

- ・白井事務局長より、審議資料 4-2 に基づき、理事候補者が報告された。中国四国地区では辞退者が出たことにより欠員（1名）が生じ、選挙により選出された理事は27名となった。会則では理事は30名以内とされているが、この1名分を委嘱理事で充当することが提案され承認された。また、前田次期会長より、学会の更なる発展に向け、各地方における学会活動促進を期して、高橋興会員（青森中央学院大学）、望月國男会員（東海大学）、若園雄志郎会員（宇都宮大学）を委嘱理事として選出することが提案され承認された。以上の計30名の候補者が第4期理事として承認された。

#### 6. 第4期監査の選出について

- ・前田会長より、監査として入澤充会員（国士舘大学）、児玉奈々会員（滋賀大学）が提案され承認された。

#### 7. 著作権ポリシー案について（武井事務局長）

- ・武井事務局長より、審議資料 4 に基づき、著作権規程案の説明があった。前田理事より、本件は慎重に検討すべきである旨の提案があり、本件は継続審議事項とされ、総会では報告事項とすることが承認された。

#### 8. 第11回大会開催日程について

- ・前田理事より、次回大会は早稲田大学にて2014年9月頃開催予定であり、学生会員の増加に力を入れたい旨の話があった。確定した開催日程は会報等で周知することが確認され承認された。

#### 9. その他

- ・白井事務局長より、審議資料 6 に基づき、総会次第について説明があった。岩崎理事より、教育学関連学会連絡協議会に本学会が参加すると回答したが連絡がない状況が続いていることについて質疑があり、同協議会に確認することになった。

#### <その他>

- ・前田理事より、資料「日本学習社会学会会則の改正について（案）」に基づき、学会運営の充実を図るため、「会長代行」を廃止し「副会長」を新設する提案がなされた。会則改正が承認され、本件は総会審議事項となった。
- ・小島会長より退任の挨拶があった。

## 第 10 回大会総会報告

日時 2013 年 8 月 31 日 (土) 14 : 40 ~ 15 : 40  
会場 関西大学千里山キャンパス 100 周年記念会館ホ  
ール 1

### 1. 会長挨拶

- ・小島会長より大会開催校に対する感謝の意が述べられた。

### 2. 大会実行委員長挨拶

- ・赤尾大会実行委員長より、学会および大会参加者に対する感謝の意が述べられた。

### 3. 議長団選出

- ・益川浩一会員ならびに白鳥絢也会員が選出され承認された。

### 4. 報告事項

#### (1) 事務局報告

##### ・2012 年度一般会務報告について

臼井智美事務局長より、報告資料 1 に基づき、学会員の現況、2012 年度の学会研究活動等および理事会の開催状況について報告がなされた。会員数は一般会員 208 名、学生会員 33 名、計 241 名である (2013 年 8 月 30 日現在)。

##### ・著作権ポリシー案の検討について

臼井事務局長ならびに武井敦史事務局員より、報告資料 2 に基づき、同案の検討状況について報告がなされた。

#### (2) 各種委員会報告

##### ・年報編集委員会

三輪建二年報編集委員長の欠席により、出相泰裕年報編集委員より、報告資料 3 に基づき、年報第 9 号の刊行等について報告がなされた。

##### ・研究推進委員会

篠原清昭研究推進委員長より、過去 3 年間および今年度の研究推進テーマの概要について報告がなされた。

##### ・国際交流委員会

森岡修一国際交流委員長より、本年 3 月 16 日に開催された研究会について報告がなされた。

### 5. 審議事項

#### (1) 2012 年度決算案について

臼井事務局長より、審議資料 1 に基づき、2012 年度決算案について説明があり原案通り承認された。

#### (2) 2012 年度会計監査報告について

武井敦史監査より、審議資料 2 に基づき、適切に会計処理がなされている旨の報告がなされ承認された。

#### (3) 各種委員会より

##### ①年報編集委員会

出相年報編集委員より、審議資料 3 に基づき、年報執筆規程の改正案 (所定の頁内で執筆することを要件とする) と原稿提出期限について説明がなされた。

##### ②研究推進委員会

篠原研究推進委員長より、審議事項はないことが報告された。

##### ③国際交流委員会

森岡国際交流委員長より、委員会活動費の予算増額について説明がなされた。

#### (4) 2013 年度活動計画案について

臼井事務局長より、審議資料 4 に基づき、活動計画案の説明がなされ原案通り承認された。

#### (5) 2013 年度予算案について

臼井事務局長より、審議資料 5 に基づき、予算案について説明がなされた。『学習社会研究』編集委員会活動費を廃止し、『学習社会研究』のあり方を検討するための活動費として『学習社会研究』編集活動費を新設し、3 万円を計上することについて口頭で補足説明がなされ承認された。

#### (6) 第 4 期役員選挙の結果について

出相選挙管理委員長より、審議資料 6-2 に基づき説明がなされ、第 4 期理事候補者が報告され、同候補者が第 4 期理事として承認された。また、理事の互選による会長選挙の結果、前田耕司理事が第 4 期会長として選出され承認された。最後に小島会長より、今回の選挙を踏まえ、選挙規程や選挙手続きの検討の必要性が指摘された。

#### (7) 第 4 期監査の選出について

前田耕司次期会長より、入澤充会員 (国士舘大学) と

児玉奈々会員（滋賀大学）の2名が監査として提案され承認された。

#### （8）学会賞に関する規則の策定について

小島会長より、審議資料7に基づき、規則案が提案され承認された。

#### （9）学会功労賞の推薦について

小島会長より、学会創設に貢献し創設後も会長を2期務めて学会の発展に大いに貢献したという理由から川野辺敏会員が推薦され承認された。

#### （10）日本学習社会学会会則の改正について

臼井事務局長より、審議資料8に基づき、「会長代行」を廃止し、「副会長」を新設するための会則改正が提案され承認された。

#### （11）第11回大会開催日程について

第11回大会の開催校として早稲田大学が提案され承認された。岩崎正吾大会実行委員長より、大会は2014年8月下旬から9月上旬頃に開催される見込みである旨の説明がなされた。

#### （12）その他

なし

### 5. 議長団の解任

### 6. その他

- ・小島会長より、会長退任の挨拶があった。
- ・前田新会長より、会長就任の挨拶があった。また新役員が以下のとおり推薦され承認された。

副会長 佐藤晴雄会員（日本大学）

年報編集委員長 堀井啓幸会員（山梨県立大学）

研究推進委員長 田中雅文会員（日本女子大学）

国際交流委員長 岩崎正吾会員（早稲田大学）

顧問 川野辺敏会員（星槎大学）

学会賞担当 亀井浩明会員（帝京大学・名誉）

事務局長 佐藤千津会員（東京学芸大学）

- ・総会閉会後に学会功労賞の授与式を行い、小島会長より川野辺敏会員に同賞が授与された。

## 日本学習社会学会 第4期理事

役員選挙の結果を受け、第10回大会総会の議決を経て以下の会員が第4期理事として就任しました。任期は、2013年9月（第10回大会後）から2016年の第13回大会までとなります。なお、2013年11月10日の理事会にて常任理事の選出および各種委員会委員等の承認を行いました。

エリア ○内は地区定数	役職・担当	氏名（所属）
北海道・東北 (1)	第12回大会担当、常任理事	玉井 康之（北海道教育大学）
関東 (17)		新井 郁男（上越教育大学・名誉）
	国際交流委員長、第11回大会担当、学会設立10周年記念出版事業担当、常任理事	岩崎 正吾（早稲田大学）
		貝ノ瀬 滋（三鷹市教育委員会）
	事務局次長、常任理事	金塚 基（東京未来大学）
		金山 光一（早稲田大学・非常勤）
	学会賞担当、常任理事	亀井 浩明（帝京大学・名誉）
		川野 佐一郎（早稲田大学・非常勤）
	顧問	川野辺 敏（星槎大学）
		北神 正行（国土舘大学）
	事務局長、常任理事	佐藤 千津（東京学芸大学）
	副会長、選挙制度担当、常任理事	佐藤 晴雄（日本大学）
		関 啓子（一橋大学・名誉）
	研究推進委員長、常任理事	田中 雅文（日本女子大学）
		廣瀬 隆人（宇都宮大学）
	会長、常任理事	前田 耕司（早稲田大学）
		三輪 建二（お茶の水女子大学）
		森岡 修一（大妻女子大学）
中部 (5)		浅野 秀重（金沢大学）
		篠原 清昭（岐阜大学）
		鈴木 三平（常葉大学）
		富士原 雅弘（東海大学）
	年報編集委員長、常任理事	堀井 啓幸（山梨県立大学）
近畿 (3)	選挙制度担当、常任理事	今西 幸蔵（神戸学院大学）
		小島 弘道（龍谷大学）
	学会HP担当、常任理事	若槻 健（関西大学）
四国・中国 (1)		
九州・沖縄 (1)		岩永 定（熊本大学）
会長委嘱理事		高橋 興（青森中央学院大学）
		望月 國男（東海大学）
	事務局次長、学会HP担当、常任理事	若園 雄志郎（宇都宮大学）

## 監査・各種委員会・ワーキンググループ

### <監査>

役職	氏名(所属)	
監査	入澤 充(国士舘大学)	児玉 奈々(滋賀大学)

### <年報編集委員会>

役職	氏名(所属)	
委員長	堀井 啓幸(山梨県立大学)	
副委員長	廣瀬 隆人(宇都宮大学)	
委員	浅野 秀重(金沢大学)	入澤 充(国士舘大学)
	川野 佐一郎(早稲田大学・非常勤)	栗原 幸正(茅ヶ崎市立梅田小学校)
	柴田 彩千子(帝京大学)	武井 敦史(静岡大学)
	富士原 雅弘(東海大学)	
編集幹事	田中 謙(埼玉東萌短期大学)	松岡 侑介(日本大学)

### <研究推進委員会>

役職	氏名(所属)	
委員長	田中 雅文(日本女子大学)	
委員	石井山 竜平(東北大学)	江原 裕美(帝京大学)
	坂内 夏子(早稲田大学)	坪内 一(横浜市立中央図書館)
	長島 啓記(早稲田大学)	中村 香(玉川大学)
	若園 雄志郎(宇都宮大学)	

### <国際交流委員会>

役職	氏名(所属)	主担当(予定)
委員長	岩崎 正吾(早稲田大学)	中央アジア
委員	赤尾 勝己(関西大学)	アメリカ
	金山 光一(早稲田大学・非常勤)	世界の学校
	末松 裕基(東京学芸大学)	イギリス
	森岡 修一(大妻女子大学)	ロシア
	金塚 基(東京未来大学)	中国

### <選挙制度検討ワーキンググループ>

役職	氏名(所属)	
世話人	出相 泰裕(大阪教育大学)	
	今西 幸蔵(神戸学院大学)	佐藤 晴雄(日本大学)

### <学会ホームページ検討ワーキンググループ>

役職	氏名(所属)	
世話人	若槻 健(関西大学)	
	児玉 奈々(滋賀大学)	若園 雄志郎(宇都宮大学)



## 会長就任のご挨拶

会長 前田 耕司（早稲田大学）

日本学習社会学会は本年の関西大学大会で設立 10 周年を迎えました。まだまだ若い学会ですが、これを機にさらなる飛躍に向けて新たな一歩を踏み出すこととなります。

このような学会の節目となる重要な時期に会長という要職を仰せつかり、舵取り役としての責任の重大さに身の引き締まる思いを感じております。

これまで会長職を務められた川野辺・小島の両先生と比べ、学問的知見・指導力ともにまだまだ未熟とは思いますが、会員の皆様方のご期待に沿うべく学会に全身全霊を捧げる所存です。何卒よろしくご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

さて、今期の理事会には、前期理事会の積み残しとなった宿題がいくつかあります。1つは、他学会でも学会誌作成のうえで重要な論点となっております著作権ポリシーの検討です。これについては、その運用に実際にかかわる年報編集委員会で審議いただき、電子化推進により本学会年報の認知度および評価がさらに高まることを期待します。2つめは、役員選出規定の改定等の問題です。規定も 10 年も経過すると見直しの必要が出てきます。選挙地区における、いわゆる「一票の格差」の問題です。本事案に関しては前選挙管理委員長を軸に WG を組織し、検討することとなります。3つめの申し送り事項は、学会設立 10 周年記念出版事業です。本事業は、過日の大会における設立 10 周年記念事業シンポジウムと連動する一大事業で、本学会における 10 年間の研究の蓄積が問われる重要な取り組みです。いずれにしても、今期体制下では、こうした課題に対応するため、事務局機能の分散化も視野に入れて役職担当の一極集中を避け、全国の理事・会員の学会運営への参画をめざします。

最後に、設立以来の懸案事項である学会財政の安定化をめぐる課題です。会員数の増加が見込めれば、廃刊の危機にある『学習社会研究』の継続もあり得ます。本学会の魅力为新入会員の獲得に向けどのように発信していくのかは、財政の安定化にもつながる喫緊の課題であり、学会ウェブサイトの充実や中長期の財政計画の策定とあわせて、今期体制下の最優先事項として取り組む所存です。その意味でも、第 11 回大会は、日本学習社会学会らしい特色がでるような研究大会になることを願っております。学会として新規のプロジェクト、たとえば会員提案型のプロジェクト研究をどのように立ち上げていくのか、海外の研究者との共同研究の成果を報告いただく機会をどのように設定するのか、プロジェクト研究での成果はもとより、研究成果の国際社会への発信、および研究の国際的な交流をどのように推進していくのかは本学会が検討すべき最重要課題であるといえるでしょう。

本学会の更なる発展のために微力を尽くしてまいりたく存じますので、会員の皆様には今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 年報編集委員長 ご挨拶

堀井 啓幸（山梨県立大学）

三輪建二先生から第 4 期の年報編集委員長を引き継ぎました。

日本学習社会学会に入会してから、今回の年報編集委員を引き受けていただいている浅野秀重先生の企画に関わって『「地域づくり」と市民の学習』というテーマの課題研究で 2 度発表させていただき、年報においてもその報告をさせていただきました（第 2 号「複合的施設を活用した学校と地域の連携—学校安全という側面からみた現状と課題—」、第 5 号「学社連携による地域づくりの課題—家庭教育に関する調査結果を踏まえて—」）。どちらも自らが関係する科研等の研究成果を発表し、「学習社会」をそれほど意識することなく問題提起をさせていただきました。本学会が創設して 10 年の節目を迎え

た時に、学会の顔である年報編集の仕事をお引き受けすることになり、身の引き締まる思いがあります。

年報の目次を1号から9号までざっとふり返ると、当初、「学習社会」とは何ぞやと多様に論じられていた内容が、少しずつ絞られてきた感があります。それぞれの時期の課題を垣間見るようですが、本学会の特徴である多様性と実践性、そして系統性をどのように世の中に問いかけるのか、難しさがあると思いました。

「生涯教育」、「生涯学習」と「学習社会」の違いが今も多様に論じられるように、本学会では多様な領域の研究や実践が混じりあい、相互に影響し合って、新たな理論や実践を生み出していくことが求められています。小島弘道前会長からは実践論文を多く掲載してほしいと言われました。その一方で、三輪前年報編集委員長からは論文をたくさん掲載したかったけれど難しかった旨の引継ぎもありました。第3期から引継ぎをされた課題について成果が問われるのが今期の年報かもしれません。

廣瀬隆人副委員長をはじめ、多様な領域、理論と実践両方に多くのご実績をもっておられる会員に編集委員になっていただきました。皆様の積極的な投稿をお待ち申し上げます。

## 研究推進委員長 ご挨拶

田中 雅文（日本女子大学）

研究推進委員会委員長に就任した田中雅文と申します。

前委員長の篠原清昭先生の後をうけ、日本学習社会学会及び会員の研究活動の発展に尽力したいと思っております。本学会はまだまだ若い学会ですので、自由な議論を後押しできるような役割を担う所存です。

研究推進委員会の活動は、毎年の研究大会における「課題研究」の企画・運営が主となります。個人研究発表と並んで学会の研究活動の実際と展望を学会内外に示す、とても重要な位置を占めるものと考えています。本学会は学習社会に焦点をあてた学会であることから、研究テーマは幅広く、学習や教育に関する多様な領域を視野に入れた課題設定が必要だと考えています。既存の研究領域のみならず、それらの融合した領域や領域間をまたがるテーマにも注目しながら、これからの学習社会をリードする課題研究を設定していきたいと思っています。そのため、研究推進委員は多様な分野の方々をお願いしました。

「課題研究」の他に、適宜、会員が自由に参加できる研究会も設ける予定です。多くの会員が研究会に参加され、そこでの議論を積み重ねて研究大会のテーマを集約していければいいのではないかと考えています。研究会や研究大会での議論をふまえて、従来の学問分野の枠組みにこだわらない、斬新な研究活動のきっかけを提供することを目指しています。

今後、「課題研究」の企画については、委員会の中で協議していきますが、会員の方々にも「課題研究」のテーマについては、さまざまな角度からご意見をいただきたいと思っております。多くの会員が参加しながらテーマ設定と研究大会での議論が進められることを期待しています。

至らぬ点多いかと思いますが、3年間よろしく願いいたします。

## 国際交流委員長 ご挨拶

岩崎 正吾（早稲田大学）

理論的な裏づけを背景として、日本学習社会学会における国際交流活動を意欲的に実践してこられた初代森岡委員長の後を受け継ぎ、この度、第二代国際交流委員長に就任することになりました岩崎です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

学会における国際交流をどのように発展させていけばよいのか、まだ試行錯誤の境地ですが、先輩諸氏の力を借りつつ、

これまでの経験に学びながら進めて行ければ良いのではないかと考えています。幸いにも、新しく委員として承諾して頂いた先生だけでなく、前委員会の先生方にも新委員会のメンバーとして快く加わって頂くことになり、安堵しているところです。11月10日に開催された日本学習社会学会理事会で、前掲の委員が新メンバーとして承認されましたので、ご紹介申し上げます。

2004年に日本学習社会学会が設立されて、今年で10年目を迎えたわけですが、この間日本を取り巻く激動の国際情勢の中にあって、学習社会学研究のいっそうの拡がりや深まりが必要とされていることを実感しています。日本学習社会学会における国際交流は、こうした研究を下支えするべく、世界へと繋がる多様な人的交流を通して、視野を広げ、研究を掘り下げるための「楽しい機会」として組織することができればと思念している次第です。会員の皆さんのご協力と忌憚のないご批判をお願いしまして、ご挨拶とさせていただきます。

## 退任のご挨拶

前会長 小島 弘道 (龍谷大学)

このたび日本学習社会学会の会長の任を終えることになりました。

3年前、会長に推薦された時、向こう3年で取り組むべきことを考えた際、三つの課題を自らに課しました。学会の研究推進体制の構築、学会年報の充実、持続的学会運営のための財政の構築です。

学会の研究体制の構築では、研究推進委員会と国際交流委員会を創設し、学会の研究活動の基本方針を策定しその実施運営を計画的、継続的、かつ柔軟に推進し、学術研究の質を高度化するとともに、時代の変化に伴う新たな学術研究の在り方に対応しようとしてきました。初めての試みなので委員会もご苦勞があったと思いますが、なんとか軌道に乗ったように思います。

学会年報の充実に関しては、論文投稿数が少なく、さらに採択される研究論文はほとんどない状況でした。年報編集委員会はこうした状況を大変憂いられ、何とかしなければとの思いを強くし、さまざまな試みをされてきましたが、なかなか思うようには進みませんでした。そうなっている理由のひとつにダブルスタンダードの問題があるのではとの指摘が出されました。要するに本学会には「学会年報」と「学習社会研究」という二つの研究刊行物があり、これが会員の研究論文投稿意欲を分散させ、結果として年報への投稿が今ひとつになっているのではないかと指摘です。わたしもまったく同感です。在任中にこの問題の解決はできませんでしたが問題の所在は理事会の話題とし、それなりの理解を得たものだと思っています。

最後の財政の構築ですが、これは厳しい財政事情ということです。近々、財政の破たんを招きかねないことが予想され、これをどうすればよいかということでした。会員増を期待するにも限度があります。一方で研究推進体制をしっかりとしたものにするという第一の課題があり、これに財政支援を充実する必要がありましたが、これもなかなか進めることができませんでした。理事会で繰り返し善後策を相談してきましたが、結局、当面「学習社会研究」の発行については財政が改善するまで予算化は難しいとの判断をしました。しかも本誌の刊行はダブルスタンダードの問題と重なり慎重に進めていくべき問題だと思っています。

10周年を節目に本学会がこれまで蓄積してきた知や実践の成果を世に問うことができるかどうか検討することが総会で承認されました。これを弾みにして新執行部のもとで本学会の更なる発展を期待したいと思います。

本学会が設立されたのは2004年でした。設立10周年の節目にあたる関西大学での第10回大会をどのように取り組み、次の発展につなぐかということが私に課せられた最後の、そして最大の使命でした。10周年記念シンポジウムを開催できたことは学習社会研究の節目を刻み、そして一定のパースペクティブを描くことができたと思っています。

最後に本学会の運営にご支援をいただきました会員各位に深甚からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

## 学会褒賞制度の創設と「学会功労賞」の授与

第10回総会において学会褒賞制度が承認され創設されました。学習社会研究と学習社会の構築・推進に貢献した会員に対して授与されるもので「学術研究賞」と「学会功労賞」が設けられました。このうち、本学会の発展に特に貢献した会員に授与される「学会功労賞」を川野辺敏会員（星槎大学）が受賞されました。学会設立に向けて尽力され、学会設立後も会長を2期の長きにわたって務められるなど、学会への多大なる貢献が認められました。総会閉会後に同賞の授与式が行われ、これを受けて川野辺会員より受賞のご感想をいただきました。

### 「学会功労賞」を受賞して

川野辺 敏(星槎大学)

関西大学で開催された「学習社会学会第10回記念大会」において、思いがけず「学会功労賞」を頂戴しました。会長はじめ学会員皆様のご好意によるものと、心より感謝いたします。受賞させていただきながら、学会発足当初のことを思い浮かべました。「設立趣意書」作り、組織作り、帝京大学での「第1回総会・研究発表大会」など、さまざまなことがあり、今日を迎えられたというのが実感です。

そんな中で、二つのことが忘れられません。一つは、流行語ともなっている「絆」の大切さです。発足当時のメンバーは当然でしょうが、私の古くからの仲間でした。30年前後から何らかの形で協力し合ってきた人々です。いちいちお名前は挙げませんが、皆さんの協力があって、初めて設立趣意書が出来、事務局が出来、会員の呼びかけが行なわれ、大会会場が決まり、紀要が発刊されたのです。そして、そのお一人お一人がさらに輪を広げて、今日の状況になっているということです。学会は研究中心の組織ではありますが、人の繋がり大切さをつくづく感じています。

もう一つは、個人的な気持ちではありますが「人間らしく生きる」人々のための学会にしたいということでした。昨今の状況を眺めると、人間のおごりが見られます。いうまでもなく「小さな地球村」に住んでいるわれわれが、知識・技術を過信し、人間の住む環境を破壊するような方向に進んでいるような気がします。「壁にぶつかっている」ともいえるでしょう。「生かされている人間」を自覚し、人々が平和で、助け合い、協力しあって、生きる喜びを感じられるような共生社会を目指すことは無謀なのでしょうか。それは手に負えない課題かもしれません。しかし、それに挑戦することは生きている人間の責務のような気がします。個々の人々が学習に価値や喜びを感じ、その個々人の集合としての「学習社会」が求められているのです。どのようなシステムのもとで、どのような対象・場・機会に学習が求められるのか、この大きな課題に力を合わせて挑戦したいものです。

## お知らせ

### 1. 新入会員

2012年9月から2013年10月までに以下の方々が入会されました。

長谷川 晴通 (常葉大学大学院生)  
吉田 ちひろ (筑波大学大学院生)  
大野 順子 (関西大学大学院生)  
氏原 茂将 (川口市立映像・情報メディアセンターメディアセブン)  
長島 達也 ((株)ラーニング・オーガナイゼーションジャパン)  
吉田 裕子 (慶應義塾大学通信教育課程学生)  
河合 早苗 (岐阜女子大学大学院生)  
山本 直子 (筑波大学大学院院生)  
古田 雄一 (筑波大学大学院院生)  
権田 恭子 (新潟産業大学)  
坂内 夏子 (早稲田大学)  
天野 かおり (尚絅大学) (順不同)

### 2. 第11回大会の開催予定

第11回大会は、岩崎正吾会員(早稲田大学)を大会実行委員長とし、以下の日程で開催されます。自由研究発表の募集等については、改めてご案内いたします。

- 日程 2014年9月6日(土)～9月7日(日)
- 会場 早稲田大学(東京都新宿区)

### 3. 教育関連学会連絡協議会への加盟

本学会は教育関連学会連絡協議会に加盟する方向で検討いたしております。同協議会に加盟することにより、教育に関する学術活動において他学会との相互交流や連携が促進されるものと思われまます。詳細は学会ホームページや会報でお知らせいたします。

### 4. 学会事務局の移転

第4期理事会体制の発足に伴い、事務局が移転しました。但し、事務局のメールアドレスと学会費振込先口座には変更がありませんので、引き続き同じものをお使いいただけます。

#### 【学会費振込先】

郵便口座： 00270-3-100822 日本学習社会学会  
銀行口座： ゆうちょ銀行 ○二九店  
当座預金 0100822

### 5. 学会ホームページのリニューアル

学会事務局の移転に伴い、学会ホームページをリニューアルする予定です。移行期間の後に新しいホーム

ページを開設いたします。ご不便をおかけする時期があるかも知れませんが、ご理解とご協力をお願いいたします。

### 6. 会員名簿の情報更新

2012年に会員名簿を作成しましたが、ご異動等により情報に変更が生じましたら速やかに事務局までお知らせください。

### 7. 寄贈図書

- ・ 渋江かさね会員(静岡大学)より、渋江かさね著『成人教育者の能力開発—P.クラントンの理論と実践』(鳳書房、2012年)
- ・ 佐藤千津会員(東京学芸大学)より、日本国際教育学会紀要第18号『国際教育』(学事出版、2012年)
- ・ 金藤ふゆ子会員(文教大学)より、明石要一、岩崎久美子、金藤ふゆ子、小林純子、土屋隆裕、錦織嘉子、結城光夫著『児童の放課後活動の国際比較—ドイツ・イギリス・フランス・韓国・日本の最新事情』(福村出版、2012年)
- ・ 益川浩一会員(岐阜大学)より、『戦後岐阜社会教育史研究—一九四五—一九七〇年における岐阜県内地域・自治体の』(開成出版、2013年)
- ・ 三輪建二会員(お茶の水女子大学)より、マルカム・ノールズ著、堀薫夫・三輪建二監訳『成人学習者とは何か—見過ごされてきた人たち』(鳳書房、2013年)
- ・ 日本国際教育学会紀要編集委員会より、日本国際教育学会紀要第19号『国際教育』(学事出版、2013年)
- ・ 玉井康之会員(北海道教育大学)より、玉井康之監修、二宮信一・川前あゆみ編著『教育活動に活かそう—へき地小規模校の理念と実践』(教育新聞社、2013年)
- ・ 田中雅文会員(日本女子大学)より、田中雅文・廣瀬隆人編著『ボランティア活動をデザインする』(学文社、2013年)
- ・ 出相泰裕会員(大阪教育大学)より、『大学開放論—国立大学生涯学習系センターによるセンター・オブ・コミュニティ(COC)機能の促進』(大阪教育大学教職教育研究センター、2013年)

#### お詫び

10月26日に予定されておりました理事会が台風の影響で延期となったことに伴い、会報の発行も遅れましたことをお詫びいたします。

## 年報第 10 号の自由投稿論文の募集

年報編集委員会

会員の皆様には、ご健勝にてお過ごしのことと存じます。さて、年報第 10 号の自由研究論文の投稿につきまして、以下の要領で募集しますので奮ってご投稿ください。なお、原稿の提出要領の詳細や編集規程に関しましては、学会のホームページをご覧ください。

### 1. 投稿論文テーマ

論文のテーマは日本学習社会学会の活動の趣旨に沿うものとする。

### 2. 投稿者資格

- (1) 本学会会員で前年度までの会費を納めている者
- (2) 上記以外のもので編集委員会が特に委嘱または承認した者

### 3. 投稿論文資格

投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭発表及びその他の配布資料の場合はこの限りではない。

### 4. 原稿規格

- (1) 原稿の量
  - a) 研究論文は図・表・注・引用文献・参考文献等を含めて 16,700 字、かつ年報の 9 頁分以内（ただし表題と執筆者名の分を 9 行あける）とする。
  - b) 研究ノートは図・表・注・引用文献・参考文献等を含めて 13,000 字以内、かつ年報の 7 頁分以内（ただし表題と執筆者名の分を 9 行あける）とする。
  - c) 実践報告は図・表・注・引用文献・参考文献等を含めて 8,000 字以内、かつ年報の 4.5 頁分以内（ただし表題と執筆者名の分を 9 行あける）とする。
  - d) ワープロ原稿の場合は横書きで印字する。原稿用紙の場合は A4 版 400 字詰原稿用紙（横書き）を用いる。いずれの場合も字数制限を厳守すること。ただし、年報における見出し・小見出し等は 2 行取りとする。
  - e) 年報編集委員会が特に枚数を指定した原稿は上記を適用しないものとする。
- (2) 図・表・注等の規格
  - a) 図・表はワープロ原稿の場合には論文中に挿入または貼付し、原稿用紙の場合には原稿中に挿入せず別の用紙に貼付し、その印刷位置・サイズをあらかじめ原稿に表示しておくものとする。
  - b) 注・引用文献・参考文献等は原稿末尾に一括して掲げるものとする。
  - c) 注の番号形態は「(1) (2) ...」とする。
- (3) 審査の公正を期すための留意事項
  - a) 氏名・所属機関名は原稿には記入せず、別紙（5. 提出原稿・書類の④）に記載する。
  - b) 本文および注において「拙稿」「拙著」等の投稿者名が判明するような記述を行わない。

## 5. 提出原稿・書類

投稿にあたっては以下の原稿及び書類を提出すること。なお、提出された原稿及び書類は原則として返却しない。投稿者は論文原稿のコピーを必ず保存すること。

- ① 原稿 3 部（内 2 部は複写可）
- ② 和文題目及び約 800 字の和文要旨 3 部
- ③ ②の冒頭に、日本語のキーワード 5 語以内を記入する。
- ④ 下記の事項を記載した別紙 1 部
  - ・執筆者氏名（日本語及び英語表記）
  - ・所属機関名（日本語及び英語表記）
  - ・研究論文、研究ノート、実践報告のいずれかを明示し、その題目（和文及び英文）
  - ・連絡先等（郵便番号、住所、電話・FAX 番号、e-mail アドレス）
- ⑤ 研究論文・研究ノートの場合、掲載が決定されたならば、直ちに英文題目及び 800 語～1,000 語の英文要旨 3 部を提出する。その際、冒頭に英語のキーワード 5 語以内を記入する。

## 6. 提出期限及び提出先

- (1) 原稿及び書類は 5 月 13 日（当日消印有効）までに年報編集委員会事務局宛に提出するものとする。
- (2) ワープロ原稿で提出した者は、掲載決定後速やかに打ち出し原稿とテキスト形式のデータの入ったフロッピー（CD でも可）を指定された月日までに年報編集委員会事務局宛に送付すること。遅延した場合は理由のいかんを問わず掲載しない。

日本学習社会学会 年報編集委員会事務局  
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40  
日本大学文理学部教育学科 松岡侑介宛